

日本聖公会 管区事務所だより

日本聖公会管区事務所
162-0805 東京都新宿区矢来町 65
電話 03 (5228) 3171 FAX 03 (5228) 3175
発行者 総主事 司祭 矢萩新一

「セーフ・チャーチという考え方」

ー日本聖公会に相応しいガイドライン策定をめざしてー

管区事務所総主事 司祭 エッセイ 矢萩新一

「むしろ、つまずきとなるものや、妨げとなるものを、
きょうだいの前に置かないように決心しなさい。」

(ローマ 14:13b)

2019 年の第 17 回全聖公会中央協議会 (ACC-17) において、「セーフ・チャーチ・ガイドライン」が決議され、アングリカン・コミュニオン の諸管区が施行することが求められています。

このガイドラインは、アングリカン・コミュニオン 諸管区のすべての人たち、ことに子ども、青年、弱い立場のおとなの安全を高めることを目的として定められたもので、教会の働き人である教役者・教会委員・役員、信徒の奉仕者たちが、日々の教会活動や組織運営において、子どもや弱い立場におかれた人々の尊厳を傷つけたり、危険にさらしたりすることのないように、教会組織として取り組む責任について記したものです。

このガイドラインには、性犯罪歴調査を含む適正評価などについても記されています。日本においても、子どもに関わる職業に就く際に、「日本版 DBS (性犯罪歴確認)」を導入することが検討されていますが、欧米とは異なる日本の仕組みの中で、日本聖公会に相応しいガイドラインを策定しようと、担当部署を中心に作業を進めているところです。

ハラスメントという言葉が一般的になって久しいですが、このガイドラインの中では、ハラスメントも「虐待＝abuse・力の誤用」の一つとして含められています。虐待というと児童虐待などをイメージしがちですが、殴る・蹴るなどの直接的な暴力はもちろん、いやがらせやあらゆるハラスメント、無視、冷酷・冷淡な接し方による精神的な暴力なども含まれます。

教会は不完全な人間が集まる場所ですので、当然様々な問題が起こる所でもあります。誰もが安心・安全な場所となるように、意識を高めて行くことが求められています。欧米の聖職者による性犯罪事件や日本の中でも様々な性犯罪事件が明らかになっている今日、教会には関係のない話ではなく、自分は大丈夫という意識を改め、ガイドラインに記された 4 つの実践、すなわち「教

口会議・プログラム等予定

(2023 年 9 月 25 日以降・前回未掲載分)

8 月

- 17 日 (木) 収益事業委員会 [+Web]
- 19 日 (土) 正義と平和・原発問題プロジェクト会議 [+Web]

9 月

- 4 日 (月) 資産運用規程検討タスクフォース会議 [管区事務所]
- 6 日 (水) 日韓協働委員会 [Web]
- 8 日 (金) 正義と平和・憲法プロジェクト会議 [Web]
- 12 日 (火) 宣教協議会実行委員会 [Web]
- 14 日 (木) 宣教協議会実行委員会 [Web]
- 25 日 (月) 資産運用規程検討タスクフォース会議 [管区事務所]
- 25 日 (月) ハラスメント防止・対策担当者会議 [Web]
- 26 日 (火) 管区共通聖職試験委員会 [Web]

10 月

- 2 日 (月) ～ 3 日 (火) 人権セミナー [京都]
- 5 日 (木) 神学教理委員会・祈祷書改正委員会合同会議 [札幌 +Web]
- 5 日 (木) 宣教協議会実行委員会 [Web]
- 9 日 (月) いのちをみつめる祈りの集い [Web]
- 9 日 (月) ～ 11 日 (水) 主教会 [横浜]
- 9 日 (月) ～ 12 日 (木) 在日韓国出身教役者の集い [弘前]
- 12 日 (木) 正義と平和・原発問題プロジェクト会議 [Web]
- 12 日 (木) 聖公会センター検討チーム会議 [Web]
- 13 日 (金) 主事会議 [管区事務所]
- 13 日 (金) 宣教協議会実行委員会 [Web]
- 16 日 (月) 財政主査会 [+Web]
- 17 日 (火) 常議員会 [管区事務所]
- 20 日 (金) 法憲法規委員会 [管区事務所]
- 20 日 (金) 正義と平和・憲法プロジェクト会議 [Web]
- 20 日 (金) 収益事業委員会 [[Web]
- 20 日 (金) 宣教協議会実行委員会 [Web]
- 21 日 (土) 原発のない世界を求める Zoom カフェ [Web]

(次頁へ続く)

会ワーカーは、誠実な行動をとる。」「虐待を受けた人たちは、公正な処遇を受ける。」「虐待に関与した教会ワーカーは、責任を問われる。」「教会の責任者たちは、虐待を隠蔽しない。」ことを目指していきたいと思います。

ACC版のガイドラインを分かりやすく翻訳した、「セーフ・チャーチ・ガイドライン（日本聖公会・ワーキンググループ編）」は管区事務所のホームページの資料のページにありますので、ぜひご覧ください。そして、各教区、管区のハラスメント防止に関わる働きを覚え、祈りお支えいただければ幸いです。

PEACE

□常議員会

第 67 (定期) 総会期第 7 回 2023 年 9 月 5 日(火)

<主な決議事項>

1. 海外出張承認に関して、武藤謙一首座主教が 9/18-9/20 済州友情教会聖堂聖別式列席のために韓国・済州へ出張することを承認した。
2. 海外出張承認に関して、矢萩新一総主事が 9/18-9/20 済州友情教会聖堂聖別式参列および日韓協働合同会議出席のために韓国・済州へ、9/20-9/21 に日韓宣教協働 40 周年会場下見のために韓国・済州へ、9/22-9/23 大韓聖公会大田教区主教按手式参列のために韓国・天安へ出張することを承認した。
3. 2023 年度教役者給与調整支援金に関して、計算実務を担ってくださった教役者給与調整タスクフォース座長の中林三平さんより説明を受け、支援教区(2 教区)の支援金額を確認し承認した。本当に困っている教区への支援が行き届くために、今後も常議員会や財政担当部門で検討を重ねる必要があることなど、意見交換を行なった。
4. 2024 年度教区分担金に関して、分担金 I については 2023 年同様にコロナの影響前の 2019 年～2021 年(2017 年～2019 年末統計より算出)の平均値で算出することを承認した。各教区分担金算出方法について財政担当者会などで情報収集をして検討する必要があるのではないか、できるだけ直近

(前頁より)

- 24 日(火) セーフ・チャーチ・ガイドライン WG 会議〔管区事務所〕
- 25 日(水) 人権問題担当者会議〔Web〕
- 25 日(水) 日韓協働委員会〔Web〕

11 月

- 6 日(月) ナザレ委員会〔ナザレの家〕
- 6 日(月) いのちをみつめる祈りの集い〔Web〕
- 7 日(火) 教役者遺児教育基金・建築金融資金運営委員会〔管区事務所〕
- 10 日(金) ～13 日(月) 2023 年日本聖公会宣教協議会〔清里・清泉寮〕
- 27 日(月) 主事会議〔管区事務所〕
- 28 日(火) 正義と平和委員会・エルサレム訪問報告会〔聖公会神学院〕
- 30 日(月) 資金運用規定検討タスクフォース会議〔管区事務所〕
- 31 日(火) 正義と平和委員会〔管区事務所〕

<関係諸団体会議・他>

- 9 月 26 日(火) NCC 役員会〔Web〕
- 27 日(水) ～10 月 4 日(水) CCA 総会〔インド〕
- 10 月 17 日(火) NCC 役員会〔Web〕
- 19 日(木) ～24 日(火) CCEA 主教会〔香港〕
- 18 日(水)・19 日(木) 日本キリスト教連合会法人事務・会計実務研修会〔Web〕
- 24 日(火) ～27 日(金) 東アジア礼拝ネットワーク会議 (ALNEA)〔ナザレの家〕
- 26 日(木) NCC 役員会・常議員会〔聖アンデレ教会ホール〕
- 30 日(月) キリスト者平和ネット運営委員会〔Web〕
- 11 月 9 日(木) ～13 日(月) アジア太平洋地域神学校ネットワーク会議〔聖公会神学院〕

の数値を用いた方がよいのではないかなど、意見交換を行なった。

5. 済州友情教会聖堂聖別式への列席に関して、お祝い金(教会の活動の為に)として 30 万円を献げることを承認した。
6. 管区諸委員に関して、7 月 15 日付で金大原司祭(東京教区)の「管区ハラスメント防止・対策担当者」「日韓協働委員」「宣教協働者招聘委員」の任を解くことを追認した(メール稟議で承認済み)。

7. 和歌山聖救主教会の基本財産変更(牧師館の撤去および新礼拝堂・牧師館の建築)に関して、追認した(メール稟議で承認済み)。
次回会議:10月17日(火)、12月6日(水)

□各教区

北海道

- ・教区婦人会第40(定期)総会 2023年9月7日(木)10時～札幌キリスト教会 開会聖餐式 司式:主教 マリア・グレイス笹森田鶴 説教:主教 ナタナエル植松 誠

東北

- ・第108(定期)教区会 2023年11月22日(水)18時～23日(木)17時 東北教区主教座聖堂 仙台基督教会(礼拝堂・ビンステッド主教記念ホール)

東京

- ・教区成立100周年記念感謝礼拝 2023年11月3日(金)13時～香蘭女学校礼拝堂 司式:東京教区聖職共同司式 説教:主教 フランシスコ・ザビエル高橋宏幸

中部

- ・第95(定期)教区会 2023年11月23日(木)10時～16時 【愛岐伝道区】主教座聖堂名古屋聖マタイ教会
【長野伝道区】・【新潟伝道区】調整中

京都

- ・第120(定期)教区会 2023年11月23日(木・祝)9時～17時 京都教区主教座聖堂/平安女学院 室町校舎 M ホール
- ・主教座聖堂聖別125周年記念行事 2023年11月3日(金・祝)13時～京都教区主教座聖堂(聖アグネス教会) 主催:主教座聖堂理事会、聖アグネス教会

大阪

- ・聖職按手式 2023年9月23日(秋期聖職按手節 土・休)11時～堺聖テモテ教会 司式:主教 アンデレ磯 晴久 説教:主教 ヨハネ吉田雅人(前東北教区主教) 司祭按手志願者:執事 ヒューム ウィリアム ユーワン
- ・教区婦人会設立100周年記念聖餐式 2023

年11月3日(金・休)13時～15時 大阪教区主教座聖堂(川口基督教会) 司式:主教 アンデレ磯 晴久(大阪教区) 説教:主教 マリア・グレイス笹森田鶴(北海道教区)

神戸

- ・第93(定期)教区会 2023年11月23日(木・祝)9時～16時 神戸聖ミカエル大聖堂(神戸教区主教座聖堂)

九州

- ・第119(定期)教区会 2023年11月23日(木・祝)8時半～16時半 九州教区主教座聖堂および教区センター

沖縄

- ・教区宣教70周年記念礼拝 9月23日(土・祝)11時～主教座聖堂 三原聖ペテロ聖パウロ教会 司式:主教 ダビデ上原榮正 説教:首座主教 ルカ武藤謙一
- ・第73(定期)教区会 2023年11月23日(木)8時半～16時 日本聖公会沖縄教区センター

□管区

- ・大韓聖公会大田教区主教按手式 天安(韓国)9月23日(土)10時半 主教被選者:司祭 テトス金 ^{キム} ^{ボウク} 鎬旭
日本聖公会より:主教 マリア・グレイス笹森田鶴、主教 フランシスコ・ザビエル高橋宏幸、主教 オーガスチン小林尚明と管区事務所総主事 司祭 エッサイ矢萩新一が出席

□神学校

ウィリアムス神学館

- ・2023年度体験入学 10月10日～12日
問い合わせ:ウィリアムス神学館 ☎075-431-5406/FAX075-431-5445(前田・山田 両主事)



†逝去者 霊魂のパラダイスにおける光明と平安を祈ります。

司祭 ディヴィット・アンソニー・コフリン(九州教区・退) 2023年7月20日(木) 逝去(85歳)

《人事》

東京

司祭 ケビン・シーバー 2023 年 9 月 1 日付 願いにより退職を許可する。

京都

サラ西井智子 2023 年 8 月 1 日付 教務所主事補に任命する。

大阪

主教 アンデレ磯 晴久 2023 年 9 月 1 日付 聖ルシヤ教会、聖ルカ教会の管理牧師に任命する。

司祭 ヨシュア原田光雄 2023 年 9 月 1 日付 休職を命じる。期間は治療終了までとする。

司祭 アモス金 頭昇 2023 年 9 月 1 日付 大阪聖三一教会副牧師に任命する。
博愛者チャプレンに任命する。

神戸

司祭 トマス河村博之 2023 年 9 月 30 日付 神戸国際大学チャプレン出向の任を解く。

2023 年 10 月 1 日付 神戸聖ミカエル大聖堂付きを命ず。

九州

執事 マグダラのマリヤ島 優子

2023 年 7 月 27 日付 戸畑聖アンデレ教会牧師補及び厳原聖ヨハネ教会牧師補の任を解く。

2023 年 7 月 28 日 公会の司祭に按手される。

司祭 マグダラのマリヤ島 優子

2023 年 7 月 28 日付 戸畑聖アンデレ教会副牧師及び厳原聖ヨハネ教会副牧師に任命する。

聖職候補生 ダビデ佐藤 充 2023 年 7 月 27 日付 久留米聖公会勤務の任を解く。

2023 年 7 月 28 日 公会の執事に按手される。

執事 ダビデ佐藤 充 2023 年 7 月 28 日付 久留米聖公会の牧師補に任命する。

沖縄

司祭 クララ咸 允淑 2023 年 9 月 1 日付 大韓聖公会ソウル教区から日本聖公会沖縄教区への移籍を受け入れる。

《教会・施設》

リーかあさま記念館（北関東） 電話番号変更 （新）0279-82-5139 （旧）090-5311-6760



■お詫びと訂正

『管区事務所だより第 388 号』 「沖縄週間 / 沖縄の旅」 参加者の感想 (10 頁・右段下から 4 行目) に「沖縄三味線」とありましたが、正しくは「沖縄三線^{さんしん}」でした。訂正いたします。(広報主事)

2023 年「平和記念礼拝」

「広島平和礼拝 2023 を開催して」

広島平和礼拝実行委員長 司祭 バルナバ 永野 拓也

今年も8月5日(土)、6日(日)に「広島平和礼拝」が実施されました。新型コロナウイルス感染症が5類に位置付けられたことにより、久しぶりに全国から多くの方が集まってくださったことを感謝いたします。「広島平和礼拝」そのものは、これまで行なわれてきたことを大切に、今年も「被爆証言」や「礼拝」が行なわれました。そういう意味では、これまでと同じ「広島平和礼拝」でした。一方で5月に広島でG7が開催されて以降、改めて「ヒロシマ」の出来事が世界中で注目された中で、8月6日を迎えることになりました。広島でG7の話題になると、世界中の首脳が集まったことへの昂揚感を持つ方もいるのと同時に、失望の声を耳にすることが多くあります。それは、被爆地広島で行なわれたサミットにも拘らず、「核兵器」の軍縮に向けて肯定的な事柄がなかったと受け止める方が多いからです。特に、「被爆の実相をもっと知るべきだ」という旨の発言をしながら、失望の声を上げている被爆者の方のニュースや声を聞くことがあります。年々、被爆者の方たちがお歳を召していく中で、どのようにして「被爆」の現実を私たちが受け止めることができるのか、それが今回の私の関心事でした。

そのような中で行なわれた広島平和礼拝ですが、今年は、関係学校の生徒さんたち「若者の祈り」を考えて祈ってくださったことが印象深い出来事でした。これは、毎年5日の夕方に平和公園の供養塔前で実施されている、カトリック教会との合同の「平和のための祈りの集い」の中で行なわれました。数年前に、カトリック広島司教区の白浜司教様の提案で、中高生が「平和について発信する」時を持てないかということで、始まっ

た試みですが、初めて聖公会の関係学校の生徒さんたちが担当してくださいました。聞くとことによれば、事前学習のために休日に集まり、そこでお祈りも考えてくださったそうです。そこで、参加した関係学校の各校一人ずつが「平和のための祈り」をしてくださいました。チャプレンの先生方のお力添えを受けながら、高校生らしい言葉で「平和」を求める祈りをしてくださったことに、とても感銘を受けました。実は、関係学校の生徒さんたちは、カトリック教会との合同プログラムを終えた後に広島復活教会に戻り、その日の感じたことなどを共有する時間を過ごしていました。私もその文書を読ませていただきましたが、「広島で実際に被爆証言を聞いて、影響を受けた」という旨のことを書いている生徒さんが何名もおられたことが印象に残っています。その文書を見て、生徒さんたちは事前学習で学んだ知識以上のものを感じ取ったのではないかと思います。



実は私は、普段から被爆証言を聞く機会があります。それは、教会の信徒さんからです。訪問にお伺いした時、ふとした瞬間に被爆体験を語ってくださる信徒さんがおられます。何気ない会話の中で、両親が被爆者であることを教えて

くださる信徒さんがおられます。そして、今でも語ってくださるたびに涙を流す方がおられます。正直に申し上げますと、私は被爆証言をどの程度理解しているか、不安に感じることの方が多いのです。あまりにも現実離れた話に、想像力が追いつかないからです。しかし、たった一発の爆弾で家族を失った悲しみ。被爆後に待ち受けていた過酷な生活。そのことを聞かせていただくたびに、核兵器がいかに恐ろしいものであるかを教えていただいています。それは「実際に聞く」ことによって、私が実感していることです。そういう意味で、関係学校の生徒さんが述べていた「広島に来て聞いたり見たりする原爆の出来事」は、私自身にも大きな意味を持っているように思います。



被爆証言を聞き、供養塔の前でお祈りをした私たちは、今年も聖餐式を行ない、プログラムを終えることとなりました。コロナ禍で広島に来ることを控えていた方たちと共に、平和を祈りながら主の食卓を共にできたことは、何よりも印象に残っています。その聖餐式に、今年は呉信愛教会の皆さんが加わってくださったこともお伝えしたいと思います。広島復活教会は、戦後信愛教会の牧師であった米村司祭の管理によって、再出発をした教会です。つまり、歴史的には兄弟のような関係です。これまでも、平和礼拝に参加していただきましたが、今年は教会として皆さんで参加してくださったことを感謝したいと思います。戦後78年を迎えて、私のように戦争を知らない世代が多くなっていることも事実です。それは、教会の歴史のことも同じです。だからこそ、皆で集まって、8月6日に起こった出来事を「聴くこと」「伝えていくこと」をこれからも大切にできればと思います。そして、キリストの平和を伝えるものとして、それぞれの生活の場で歩いていければと思います。



2023年「平和記念礼拝」

被爆78年長崎原爆記念礼拝 分かち合い

長崎聖三一教会信徒 早瀬 隆司

「キリストの平和があなたがたの心を支配するようにしなさい」

(コロサイの信徒への手紙3:15)

2023年8月9日 長崎に原爆が投下されてから78年目の長崎原爆記念日を迎えました。この日、長崎にある長崎聖三一教会にとっては一年で最も大切にしている行事の一つ、「長崎原爆記念礼拝／聖餐式」が執り行なわれました。ともに祈り学びあう時間。コロナの騒ぎが収まって、ようやく例年通りの開催が可能になったのですが、今年は台風の騒ぎに巻き込まれてしまいました。当初は、50名程度の参加を見込んで準備をしていましたが、台風が近づくにつれて、状況は変化し、出席を断念する方からのご連絡が増えてしまいました。それでも、25名が風雨をおして教会に集い、記念礼拝をささげることができました。

今年は西日本宣教協働区を構成する3教区が沖縄、広島に続いて長崎でも、ともに集って礼拝をささげました。そのため、武藤主教（九州教区）、小林主教（神戸教区）、上原主教（沖縄教区）がそろって司式をして下さり、さらに、牛島司祭（長崎聖三一教会）、柴本司祭（九州教区）、永野司祭（広島復活教会）、岩佐司祭（沖縄教区）が補式してくださり、とても迫力のある豪華な礼拝が厳かに進められました。礼拝の中では、原爆が頭上にさく裂した11時2分を黙祷のうちに迎えました。長い静かな祈りのなかで、私は、おもわず神様に問いかけていました。「神様、どうして私達人間は、世界は、戦争をし、核兵器をつくり、殺し合いをするのでしょうか？」

と。直ぐに神様から次のような応答が聞こえてきたような気がしました。「それはあなた方人間がワガママで不完全な存在で、虫ケラや川原の葦と何ら変わらないからだよ」と。私たちは、誰かが言ったように、考えるところだけが川原の葦や、他の生き物とは違う、そのような存在なのでしょう。他の生き物も生存のためにいろいろ考えているに違いないとは思いますが…。



その後、上原主教様の説教をお聞きすることができました。ロシア、ウクライナ、中東、アフリカそして北東アジアでも対立と争いの兆しが見えます。日本では、平和と自由を当たり前のように感じて享受していますが、主教様は、情報の操作が当然のように行なわれており、不安や恐怖や敵愾心があおられ、殺人



を正義のように当然のように考えてしまう戦争の危機は今も全く変わらないと警鐘を鳴らされました。米軍基地を多数有する沖縄の人々の危機感は鋭敏なものであることも感じさせられました。そして、そのような戦争の危機を回避するために、「分かち合い」の心を持つべきことを、力強く説かれました。

私たちは、豊かさと無限の欲望にとらわれ、それを当然のように思う中で欠乏やニーズといった不満を感じ、そのような現実の論理に負けてしまっていないだろうか？当日読まれた福音書(マタイ福音書14:13-21)で、イエス様が五つのパンと二匹の魚を無数の人々と分かち合うことを選択されたことに触れながら、イエス様への確信に基づく分かち合いが現実の論理に負けてはならないと説かれました。世界のクリスチャンが確信(信仰)をもって、イエス様に従うときには、「分かち合い、愛し合うこと」ができれば、神の国に近づくことができると述べられました。

礼拝が終わった後は、被爆者をお迎えして被爆体験についての証言を聞く時間を予定しておりましたが、あいにくの天候で、実施できませんでした。そのため、築城昭平さんの証言「8月9日の記憶」(公益財団法人長崎平和推進協会制

作)をビデオで鑑賞することとしました。長崎師範学校の学生であった一人の学生が、工場に動員され、空襲に悩まされる毎日を過ごし、そしてその日を迎えられました。吹き飛ばされ、放射能を浴び、左手に原爆の火傷。髪の毛が抜け、高熱、嘔吐、下痢、出血に苦しめられました。そして、「戦争は‘体験’がなくなったときに新しい戦争が起こる」「戦争は核兵器は残酷です。戦争を知らない人にも本気で考えてもらいたい、そのために語り続けていきます」と話されました。

私たちは「戦争の悲惨さを私たちは忘れず語り伝えていくことができるだろうか？」そして、「イエス様の言葉を固く信じて皆で分かち合っていくことができるだろうか？」と考えさせられました。自分の勝手な必要やニーズを当然のように考えて、現実の論理に流されかねない日常を振り返ってみる必要があることに気づかされました。神の国を固く信じて、戦争の記憶を語り続けること、平和と自由のために活動し続けることの重要性を今更ながら確認した1日でした。

証言のビデオを鑑賞して、皆で記念写真を撮りました。そして、長崎名物の皿うどんとスイカで食事を共にして、解散となりました。



2023年「平和記念礼拝」

「広島平和礼拝 2023」へ生徒たちを引率して

— 平和宣教教育の実践 —

平安女学院中学校高等学校チャプレン 司祭 エレナ古本 みさ(京都教区)

平安女学院中高では、2013年よりほぼ毎年原爆の日に合わせて、神戸教区主催の「広島平和礼拝」に参加してきました。一度だけ長崎聖三一教会での平和礼拝に参加したことがあります。コロナ禍を経て、この度実に4年ぶりに再開できたことを嬉しく思い、また管区の平和宣教教育活動資金より生徒たちの参加費に補助をいただきましたこと、心からお礼申し上げます。

この旅の大きな特徴としてあげられるのが、関西の聖公会関係学校の生徒間交流です。松陰、プール学院、神戸国際大附属、桃山学院、そして平安女学院の中高チャプレンたちが事前に交流プログラムを企画し、7月には合同の事前学習会を行なっています。内容は、各校で集めた折り鶴を千羽鶴として繋げる作業、平和礼拝で歌う聖歌の練習、カトリックと合同で行なう平和の集いで捧げるお祈りの作成など色々ありますが、メインは、広島女学院高校の生徒たちを招き「核廃絶! ヒロシマ・中高生による署名キャンペーン」について話を聞くというものです。関西の生徒たちは、同世代の広島の生徒たちが日ごろから熱心な平和教育を受け、原爆や戦争の愚かさ、恐ろしさを次の世代へ伝えていくことを自分たちの使命と考えていること、それを国内のみならず世界へも発信し、文字通り平和を造ろうとする行動力と意識の高さに感銘を受け、自分たちにも何かできないかと考える機会が与えられます。学習会は礼拝で締めくくられ、他校の平和礼拝参加者と事前に顔を合わせ、共に祈ることで生徒同士の繋がりを深めることができています。

今年度の平安女学院からの参加者は中1から高3まで12名となりました。午前7時過ぎの京都

駅発「のぞみ」に乗り、午前中のうちに原爆ドーム、碑巡りと千羽鶴の奉納、そして平和記念資料館の見学を終えました。今年は最高の暑さで、黒いスニーカーを履いてきた生徒などは地面から飛び跳ね続けなければならない状態で、碑巡りはかなりの急ぎ足で行ないました。資料館もまた、暑さからの避難と、円安の影響からか、コロナ前以上に増えた外国人訪問客でごった返し、満足に見学できたとは言い難いのですが、それでも生徒たちの中には目に涙を浮かべる者もあり、当時の惨状と日常を一瞬にして奪われた人々の苦しみを必死で目に焼き付けている様子でした。

午後、以前本校でも教鞭を執っておられた広島女学院中高の聖書の先生が学校を案内してくださいました。広島復活教会のすぐ近くに位置する広島女学院では、原爆投下当時、ちょうど朝の礼拝が終わり、多くの生徒と教職員がチャペルから外に出て来たところだったそうです。同じ年頃の少女たちの尊い命が一瞬にして奪われた悲劇を生徒たちは心に深く留め、慰霊碑に手を合わせていました。

2時からは、広島復活教会で八幡照子さんの「かけがえない命」と題された被爆証言を聞きました。八幡さんは8歳の時、爆心地から約2.5キロ離れたところで被爆、大怪我を負い、当時の地獄のような惨状とその後も終わることなく続いたご自身とご家族の心の痛み、苦しみを時折涙をぬぐいながら語ってくださいました。彼女の証言を聞いて描かれた広島の高校生による何枚もの絵がスクリーンに映し出され、当時の状況を生々しく伝えていました。八幡さんは、最後に若い人

たちへのメッセージとして、「戦争は人を加害者にも被害者にもする。国や言葉が違ってもだれもがこの美しい地球に生まれ、かけがえのない生涯を与えられている中でこのような愚かな、残酷な戦争を決して起こしてはならない。武力ではなく対話での解決を!」と熱く訴えられました。早朝から炎天下でのハードスケジュールで生徒たちはきっと眠ってしまうだろうと思いきや、みんな真剣に、メモを取りながら胸を突くような証言にしっかりと耳を傾ける姿に嬉しく思いました。

夕方、平和公園でのカトリック聖公会合同平和のつどいに参加し、それぞれの学校の代表生徒が自分たちで作った平和のための祈りを捧げ、小林主教様の平和のメッセージを聞くことができました。その後に広島復活教会へ戻り、生徒たち総勢約40名が一堂に会し、一日の振り返りと、平和のために自分たちにできることを書き留めて模造紙に貼り、テイクアウトした広島のお好み焼きをほおばりながら交わりの時間をもちました。

翌朝は8時から広島復活教会での朝の礼拝に出席し、原爆投下時間に黙祷をささげ、広島を後にしました。学校以外の礼拝を初めて体験する生徒も多く、とても良い機会であったと思います。生徒たちは今回広島で見たこと感じたことを2学期最初の朝の礼拝で全校に向けて話し、文化祭でレポートを発表し、核廃絶の署名活動を行ないます。毎年わずか10名あまりの参加で、私たちチャプレンにできることはほんの小さなことですが、大切な平和宣教教育としてこれからも続けていきたいと思います。最後になりましたが、神戸教区広島復活教会の皆様には大変お世話になりました。感謝申し上げます。

「広島平和礼拝」に参加して

平安女学院中学校 3年

田口 叶望

8月5日～6日、広島平和礼拝に参加しました。

私は、小学校の修学旅行で広島に行く予定で、千羽鶴を頑張って作っていましたが、新型コロナウイルスによって行くことができませんでした。しかし、今回、頑張って作った千羽鶴を広島に持っていき、捧げることができて本当に嬉しかったです。

広島平和資料館見学では、原爆を落とされたことが如何に残酷で大変だったかを知ることができました。例えば、原爆で亡くなってしまった人の服や、お弁当箱、水筒、家族への手紙など、いろいろなものが展示されていました。また、原爆の後遺症により、肌がただれた人の写真や、癌などによって亡くなられた人がそれまでどのように生きてきたかなど説明してくれるところなどもありました。私は、それらを真剣に一つずつ見て、とても辛い気持ちになりました。

広島女学院では、原爆で亡くなられた生徒たちの名前が石に刻まれており、それを見てこんなに多くの方が亡くなったことに驚き、他人ごとではないと感じました。その後、広島復活教会で8歳の頃に原爆にあった八幡照子さんの被爆証言を聞くことができました。

彼女のお話から本当に苦労して生きて来られたということ、戦争は絶対にいけないということが伝わってきました。初めて自分の目で見た原爆ドームは、本当に誰もが一回は来るべきところだと思ったし、貴重な被爆証言を聞き、原爆投下時間に合わせての礼拝にも参加することができて、とても良い経験になりました。

「広島平和礼拝」に参加して

平安女学院中学校 3年

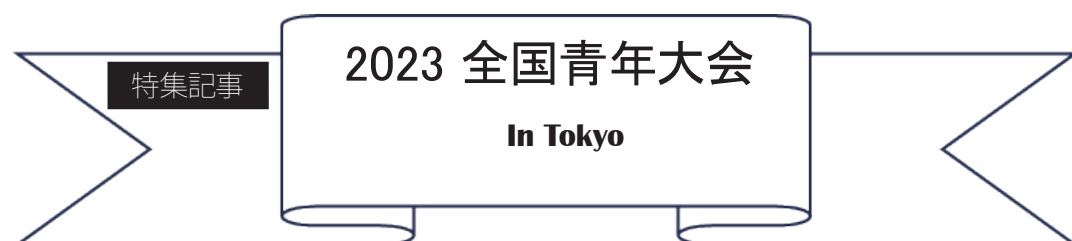
板花 奏音

私はこの広島平和礼拝に参加して色々知り、多くを考えさせられました。実際に被爆体験をされた方のお話を聞くことができました。戦争は悲しく、そして辛く、永遠に歴史に残り続けます。私

私たちはご飯を食べたり、学校へ行ったりするのは当たり前と感じていますが、それは決して当たり前でないことを実感させられました。また、平和記念資料館で被爆当時の写真を見ました。爆弾一つでこんなにも多くの人の命が奪われたのだと思うととても怖くなります。

一泊二日という短い期間でしたが、戦争の悲惨さ、平和の大切が改めて分かりました。戦争という恐ろしく、原子爆弾による爆風と熱で一瞬のうちに多くの命が奪われた辛くて悲しい体験は、私たちには想像すらできません。核兵器がなくな

れば平和になるとは限りませんが、一人ひとりが思いやりの気持ちを持ち、命を大切にするといった、今私たちにできる身近なところから始め、それを繋いでいくことが大切だと思います。原爆投下から78年経った今も、当時の苦しみはずっと続いています。原爆の恐ろしさや被爆した方々の無念さ、平和の尊さを忘れずに後世へと伝えていくことが私たちにできることではないかと実感しました。核兵器廃絶が実現し、一日でも早く世界全体が安心し、平和に暮らせる日が来てほしいと思います



コロナ禍によってもたらされた時代の閉塞感を乗り越えて、久しぶりに聖公会の全国青年大会が開催されました(2023年8月31日～9月3日)。日本聖公会の明日につながる青年大会の成果をまとめるとともに、参加者の感想をこの特集記事でお届けします。

「日本聖公会 2023 全国青年大会 in Tokyo」が 目指したもの

青年委員会担当主教 マリア・グレイス笹森 田鶴

1992年以来4年毎行なわれてきた全国青年大会は、2020年関西で開催するべく、準備が進められていました。しかしコロナ禍によりやむなく無期延期、実行委員会は解散となりました。どんなに嘆き合い、共に涙したかったことでしょう。その後状況も変化し、コロナ禍での開催企画が管

区青年委員会を中心に進められ、7年ぶりの全国青年大会が東京において実現しました。

7年は青年たちにとって途方もない年月です。だからこそ、オンラインでの交わりを越えて出会える場を何とか提供したいと願いました。そして青年たちは積極的に、あるいは教区や教会から

押し出されて、全国から集ってくれました。

多彩な背景を持つ人びとのおよそ初めての出会い、非言語を含めた生々しい経験です。そこで安心安全な場を相互に作り合い、それぞれの立場を尊重し合うという前提の中、互いの物語を聴き合う時間を大切にすることとしました。キリストによって集められた者として、誰とともに食卓を

囲んでいるのかという問いに真摯に向き合う青年たちの姿は、準備の時を含め、新しい教会（エクレシア）のようでした。青年たちは将来のための存在なのではなく、今の日本聖公会にとって大切な、かけがえのない存在であることを改めて確信した大会でした。

私たちは、誰と一緒に、食卓を囲み、 どのように歩むのか

～「日本聖公会 2023 全国青年大会」を開催して～

青年委員会 司祭 ステパノ 越山 哲也

2023 年 8 月 31 日（木）から 9 月 3 日（日）の日程で、東京新潟県人会館内及び日本聖公会神田キリスト教会を主会場として、東京上野ユースホテルを宿泊場所として日本聖公会各教区から総勢 56 名が「集まって」「日本聖公会 2023 全国青年大会」がコロナ禍を経て 7 年ぶりに開催されました。

今大会はコロナ禍になって、教会やそれぞれの普段の日常生活においてあまり意識することがなかった「集まる」ということが、当たり前ではなく特別な恵みであったことを深く思い、だからこそ「皆と集まりたい」という願いを抱き、渴望しながら準備を進めて参りました。「集まる」というキーワードから何度も話し合いを重ねて大会テーマを「わたしたちは、誰と一緒に、食卓を囲み、どのように歩むのか」としました。

また、大会の運営は青年委員会が主催のもと、各教区の青年担当者の皆さん、そして各教区から選ばれた青年スタッフの皆さんが一緒に準備の段階から担って頂きました。

大会プログラムについてご報告いたします。大会は開会礼拝に続いて丁寧なオリエンテーションを行なうことから始まりました。参加者全員が安心、安全で楽しい 4 日間を過ごすための大会が

イドラインを皆で共有し、セーフチャーチについて笹森田鶴主教よりお聴きました。大会 2 日目は、メインプログラムとして西原廉太主教より「わたしたち」って？というテーマで聖公会のルーツ、大切にしてきたことについてお話をお聴きました。続いて 4 人のスピーカーより「どのように歩めますか？」というテーマでそれぞれの「自分の物語」をお話頂き、ご自身の信仰生活、教会と関わりを持つことになった背景、今キリスト者として社会とどう向き合っているか生きているのかお聴きました。

2 つのトークセッションを経て、今度は参加者一人一人が「自分の物語」をそれぞれが語り、聴き合うグループセッション（分かち合い）の時間を持ちました。

大会 3 日目は、5 つのテーマ「教会/教区につながる活動の中で大事にしていること」、「コロナ禍でわかってきた見失ったこと、大事なこと」、「どんな時に神様を感じる?」、「私にとっての洗礼」、「クリスチャンとして見る日本の社会」にそれぞれ分かれてのグループセッション、東京での青年大会開催ということで東京教区の諸教会、諸施設、周辺を訪問する「お出かけプログラム」、キャンドル

方式による聖書の分かち合いなどを行ないました。

大会最終日には、大会のテーマを中心に過ごしてきた4日間の実りを神様におさげする感謝と賛美の閉会礼拝（聖餐式）を行ない青年大会

は閉会となり、参加者はそれぞれの地に戻っていきました。今大会の実りは参加された各教区の参加者の皆さんが寄稿くださった文章の中に豊かに表れていますので是非お読み頂ければと思います。



写真提供：青年委員会

プライバシー保護のため写真に加工が施されています。

2023 全国青年大会に 参加して

— 11 教区の青年の感想 —

とても濃厚だった4日間

横浜教区 林間聖バルナバ教会

片山 修

私にとって全国青年大会の4日間はとても濃厚な期間だった。どれも魅力的なプログラムだったが、その中でも印象に残っているのは、3日目

のグループディスカッションだった。私は「教会、教区につながる活動の中で大事にしていること」という題材を選択し、改めて、自分の中で大事にしていることを考えた時、真っ先に「恩返し」という言葉が出てきた。私はこれまで、教会の方々からとても大切にされ、キャンプをはじめとしたイベントも楽しませてもらった。今度は私が恩返しをする時だと思い、横浜教区で青年を集め、教会への奉仕や青少年のイベント運営などをする横浜教区青年会（仮）を去年発足した。同じグループのメンバーも、中高生の頃にキャンプでとても楽しい思い出をしたので、キャンプなどのイベント運営に携わるという経験をしていた。さらに、教区を超えて一緒にイベントをしようという話も出たので、実現していきたい。

私はこの大会で様々な仲間と出会い、とても

楽しい経験をさせてもらった。しかし、これを思い出のままにはせず、次の大会では、今回参加できなかったより多くの仲間たちを連れて来られるよう、私は教会、教区での活動に励み、恩返ししていこうと思う。

多くの人に支えられて

沖縄教区 屋我地聖ルカ教会

玉城 淳光

僕は、青年スタッフとして参加しました。参加当日までの間、「自分の役目を果たせるか。」「相談ができる友達ができるか？」など緊張とプレッシャーで押しつぶされそうでした。でも、いつも教会の高司祭様に「神様に聞いてみて、話してみて」と言われたことを思いだし、「神様に任された仕事だ」と気持ちを切り替え、みんなのために頑張ろうと思いました。会場では、同じ大会スタッフもいたので心を落ち着けて、楽しく元気に働けたと思います。大会当日、たくさんの参加者が集まっていたので感動しました。うれしかったです。

人の多さにはびっくりしました。最初のレクでみんなの緊張が解けて、仲良くなれて良かったです。2日目の、西原主教様の「聖公会の歴史について」の講話は、聖公会の多様性や祝福、教会の役割を考えさせられました。「地域のためにできる役割は何か?」「屋我地島・名護市・沖縄での役割は何か?」「僕にできる事は何か?」そして「それが僕にできるのか?」と思いました。これからの、僕の課題として考えていきたいと思いました。3日目の、グループシェアリングでは、「神様を感じる瞬間」について話しました。みんなの話を聞きながら共感できる事がたくさんあり、分かち合えたことが大きな喜びです。教会への思いや、気持ちなどみんなの考えが聞けて良かったです。また、東京散策では、東京諸聖徒教会や小石川植物園に行きました。楽しかったのですが距離が長く疲れました。

最終日の聖餐式で僕はサーバーを務めまし

た。自分の教会よりも人数も多く緊張しましたが、最後まで務めることができて良い経験となりました。今回、たくさんの方たちに支えられ無事に集えたこと、役割を果たせたこと、かけがえない時間を過ごせたこと、すべてが大事な主の恵みです。僕は幸せです。これからもクリスチャンとしてあゆみを続けたいと思います。

語り合えたということ

京都教区 大津聖マリア教会

野村 佳織

今回の青年大会では、様々なお話を聞き、それを全国から神様によって集められた仲間たちと共有することができました。みんなと語り合うのは本当に久しぶりのことでした。

プログラムの中で特に印象的だったのは聖公会がどのようにしてできたのかというお話を聞いた後の分かち合いです。私は、物心がつく前から聖公会の教会に通っていたこともあり聖公会以外の教会についてあまり知りませんでした。しかし、分かち合いの時間で様々な教派の教会に通っていた方のお話や海外の教会のお話などを聞き、教会の多様性を知り改めて聖公会の良さを感じることができました。

最終日の聖餐式では、大会期間中のことを振り返り、私たちが集まることのできた恵み、集められた私たちがそれぞれの場所に派遣されていくことを感じました。青年が集う礼拝は滅多にない機会で、なんとも言えない一体感を味わうことができました。

このような貴重な機会を与えていただき、感謝しています。青年大会を開催するにあたって関わってくださったみなさま、イエスさまありがとうございました。

イエス様につながって

九州教区 鹿児島復活教会
古城 ころろ

私の通う教会では青少年との交流の場を持つことが難しいので、大会を通して全国の青少年、またはその他の教会関係者の方々と同じコミュニティ内で有意義な時間を共有できたことを光栄に思います。

私は幼い頃から、自分の考えや思いを表現することが苦手でした。しかし、プログラム内で皆さんが素直にそれらを表現し、他の人の話を無条件に受け入れるような語り合いの場を目の前にして、自分を表現し他の人と何かを共有することに対する恐怖心がなくなり安心感を持てました。さらに、私は自身がキリスト教を信仰していることを誇りに思いますが、そうでない周りの人々に信仰を共有するかどうかについて思うこと

がたくさんありました。洗礼を受けていない方や普段キリスト教とのかかわりが少ない方もいらっしゃいましたが、同じイエス様の名の下で集まった私たちだからこそ、信仰心をオープンにし、ともにお祈りをささげることができました。

別れの際にはとても寂しい気持ちでいっぱいでしたが、同じイエス様を思っているために、どこにいてもつながっていると信じています。また4年後に各々が新しい姿で再開できることを期待しながら、一日一日を大切に信仰生活に励みます。

共有出来たことの大切さ・尊さ

神戸教区 神戸聖ミカエル教会
小林 真綾

私が全国青年大会に参加するのは20歳以来7年ぶりでした。2日目のプログラム『『どのように歩んで』 ますか?』ではスピーカーとしてこれま



で関わった教区・管区での青年活動などについてお話しさせていただきました。セッション後の分かち合いや他のプログラムで、コロナ禍で対面で何かする事が難しかった大学生世代が、今とても熱心に各教区で青年活動に取り組んでいるというお話を聞くことができ、つながりを引き継いでくれる頼もしい青年が多くいることに私自身とても勇気付けられました。

閉会礼拝の時、笹森主教が「『二人または三人が私の名によって集まるところには私もその中にいるのである』—これは望みではなく、キリストの約束である。私たちが集まっているところに必ずキリストがおられる。」というお話をされました。久しぶりに会う人は数日前にも会っていたような感覚、初めましての人もなぜか安心して話せるこの不思議な感覚は、私たちが教会に連なり、キリストと共にいるからこそ、安心して時間や言葉や想いを分かち合う事ができるのだと感じました。

ここ数年間は叶わなかった顔を合わせて共に祈りをする事、時間を共有する事の大切さや尊さを改めて感じる事ができた大会でした。

対面集会の意義を実感

大阪教区 石橋聖トマス教会

小松 虎ノ介

今回は7年越しの青年大会でしたが、私は2020年に予定されていたものではスタッフとして携わるはずでした。実はその当時からスタッフなどで声がかかる人が固定されてきており、次回以降のスタッフは断って他の青年に任せようとも思っていました。

しかし、東京に来てほしいという電話にOKした結果結局スタッフとしての参加となり、少し後悔することになります。ただそうでもしなければ参加しなかっただろう事を考えると、それでも良かったのではないかと思います。新しい友達もでき、久々に会う仲間とも楽しく過ごすことができました。

私は人と会えない日々が続いても特にストレスなどはなく、運営側がオンラインよりも対面にこだわる理由に疑問を感じていましたが、実際に集まってみるとやはり対面は対面で良いものだな



とこれまでもキャンプ等で集まるたびに感じていたことを今回もまた思い出ことができました。また、スタッフとして関わったレクリエーションも大成功で終えることができ、個人的には大満足の4日間となりました。次回がいつになるか未定とのことではありましたが、次は参加者として楽しめたらと思っています。

同じ世代と出会い 共有出来たもの

中部教区 岐阜聖パウロ教会
山本 真波

私は幼いころから両親の影響で地元の教会に通っていました。小学生ごろまでは毎週のように通っていたのですが、中学や高校に進学し、忙しさを言い訳にして段々と教会に行かなくなっていました。私の教会は年齢の高い信者の方が多く、教会に行かずに同年代の友人と過ごす時間を優先してしまったことがその理由でした。

今回、全国青年大会に参加する機会を頂き、自分と同年代の子たちがこんなにもたくさんいたのだと感激しました。自分と同じ世代のみんなと聖書について話したりと、いろいろな話を聞いて思ったことを共有することで、青年大会に参加している青年のみんなはそれぞれがキリスト教や聖書に真剣に向き合っているように感じ、自分の考えたことの無かったキリスト教の素晴らしさや聖書の教えることが出来ました。あまり深い考えを持たずに親に連れていかれて参加していた礼拝もよくわからずに聞いていた聖書のみ言葉にも正面から自分の意志をもって向き合うことで、自分が信じてきたキリスト教が何なのか知ろうと思える大切な機会となりました。

青年大会を通して出会えた仲間、みんなが私にくれたキリスト教に対する素晴らしい気づきを大切にしていきます。

青年大会で得た新たな繋がり

東京教区 三光教会
土井 優美

主の平和がありますように。8月31日から9月3日まで、東京教区青年スタッフとして全国青年大会に参加しました。多くの関係者の方々のご尽力で無事に青年大会が行なわれたことを感謝いたします。

コロナ禍が私たちから何気ない日常の営みを奪い、4年間もの間、顔を見て会話し、食事を共にし、思いを分かち合う機会が制限されました。教会活動においても、礼拝や諸活動の制限、キャンプなどのイベントが中止されました。そのため、青年大会では準備の段階から皆が共に集まり、お互いを知ること重点を置いてプログラムを考えていました。

青年大会の交わりを通して、全国から青年が「集まること」の大切さに改めて気づきました。お互いの思いを分かち合い、自分には無い視点での意見を聞く中で、自分の大切にしたいことや教会の一員として大切にすべきことを考える良い機会となりました。

大会聖句にもあるように、私たちが神様によって集められた時、神様もまたそこにいます。私たちはそれぞれ日常の生活に戻りましたが、青年大会で得た新たな繋がりをもとに、教会・教区を越えた信仰の絆を深めていきたいと思います。

自分を大きく変えた大会

東北教区 仙台聖フランシス教会
千葉 剛史

今大会を通じて、全国から集まった多くの青年たちと同じ時間を過ごし、充実した4日間を過ごすことができました。自分と同世代の青年が全国の教会にたくさんいることを感じる事ができ

た事に非常に感激をしました。コロナ禍の生活によって人と人の距離が離れてしまったこともあり、青年たちと実際に会い寝食を共にした大会期間中は、同じ場所で同じ時間を過ごすことのありがたさを改めて感じることができました。

今大会のお話を聞いた際、私は、教会への関わりが薄い自分が果たして参加してよいのだろうかと考えていました。私の中では、自分が洗礼を受けていないことが、青年大会に参加する上で大きな引っ掛かりとなっていました。今思うと、洗礼の有無に大きな違いがあると考えていたことで自ら壁を作っていたように思います。大会のグループシェアリングの中で話を聞いたことや、他の教区の青年たちと接する中で、自分の考え方は大きく変わったように思います。教会に携わることに自信を持つことができ、教区での活動にも参加してみたいと思いました。今大会は、私と教会との距離を縮めるきっかけになったと強く思います。

共有できた多くのもの

北海道教区 札幌キリスト教会

上平先生から青年スタッフとして声をかけられたときは、まさに青天の霹靂という思いだった。私なんかでよいのだろうか?と思いながら、まあ他にやる人もいないだろうから、という理由で引き受けた。それから2回の準備会、Zoomでのミーティングを経て、いよいよ本番を迎えた日、正直言って心配で仕方なかった。青年スタッフとして、うまく仕事をできるだろうか。臨機応変に対応できるだろうか。みんなとコミュニケーションが取れるだろうか。担当する礼拝は成功するだろうか、等々。

しかし、いざ始まってみればそれは杞憂だった。さまざまなプログラムを通して、優しさに満ちた人たちに囲まれ、喜び、悲しみ、くやしき、痛み、愛、希望、信仰など、いろいろな感情を共



有することができた。まるで、自分と他者の境界線がなく一つになって、神の器になっているように感じられた。パンと葡萄酒を分け合うように、感情を分け合っていた。同じ信仰を持つ仲間たちとの出会いによって、今後の生活も霊的に励まされた。この経験を与えられた主に感謝。

「楽しかった」企画に携わって

北関東教区 大宮聖愛教会
石森 未和

今回の青年大会は、私にとって前回の北海道に続き2回目の大会、初めてスタッフ側での参加でした。昨年の11月と今年の5月の準備会を通して、みんなで色々な案を出しあい、様々なプログラムを行なうことができたと思います。私は‘お出かけプログラム’の担当でしたが、ちょうど私

生活も忙しくなるタイミングと準備期間が偶然一致してしまい余裕がなく、ギリギリまでプログラムの準備をする事になってしまい青年委員・担当の皆さんの協力で形にすることができ、本当に感謝しています。また参加者の皆さんに感想を聞いたところ、皆さん楽しかった!と話してくださってとても嬉しかったです。

前回の青年大会やU-26に参加していた時もありましたが、普段の教会生活で感じていることや、それぞれの教区事情などを話したり聞いたりするのは自教会ではないことなのでとても面白かったです。ぜひ自教区の青年にも体験してほしいと思いました。

最後にこのコロナ禍で様々な事が制限・中止になった三年間を経て、ようやく皆で協力して企画を作り上げ開催できたこと、参加者が最後「楽しかった」と笑顔で帰って行ける企画に携われて本当に良かったです。ありがとうございました!

国際典礼学会に参加して (8/3～8/11 於: ダブリン)

— 専門家集団との貴重な交わりの場 —

司祭 ダビデ市原 信太郎

去る8月7日～11日まで、国際典礼学会(Societas Liturgica、以下SL)に参加したので簡単に報告する。

SLは1967年に設立された、文字通り典礼に携わる研究者・担当者が集まる学会である。その大きな特徴はエキュメニカルであることで、これは典礼刷新運動がエキュメニカル運動と密接に関連していたという歴史的理由にもよる。この特徴から、教派的な違いが大きく現れる典礼研究の場にもかかわらず、様々な教派の人々が一堂に会する得がたい場となっている。聖公会は、その中であってかなりの存在感があり、会期中に一

度聖公会関係者にアングリカン・コミュニオンを担当幹事が声をかけて集会を持ったところ、全体の参加者200余名中40名を超える、そうそうたる顔ぶれが集まった。

聖公会独自の礼拝関係のネットワークとしては、「聖公会国際礼拝協議会」(IALC)がある。もともと、IALCはSLの聖公会関係者が会期中に独立の会合を持っていたことが発足の動機であり、SLとは密接に関係していて、IALCの会合はSLが行なわれる場所の近辺で開かれるのが通常で、会合の周期や時期もSLに同期していた。しかし、各管区の礼拝担当者等、SLのメンバー

ではない参加者が徐々に増えてきて、2015 年のモントリオール大会の際、IALC の開催は SL の時期や場所には拘束されないことが決議された。また、設立の経緯もあって、IALC は研究者の集まりという性格が強かったが、SL 会員以外の参加が増えるにつれ徐々にその色が薄まり、その結果として、研究者たちにとっては必ずしも魅力的なプラットフォームでなくなった感もある。そのため、学術的な情報のフォローのためには IALC に参加するだけでは十分でないという判断をし、小生は 2017 年以来 SL にも参加するようになった。

2019 年にダラムで開催された SL の後、世界中がパンデミックに入り、2021 年のアメリカ・ノートルダム大学で行なわれた SL は完全にオンラインの会合となった。今回は、4 年ぶりの対面でのフル開催となり、再会を喜び合う姿があちこちにあった。

今回の会場はアイルランドのメイヌース大学で、ダブリンへの直行便がないため長旅になって少々消耗した。また、円安もあいまっての物価高には驚かされた。しかし、会期中提供された大学内の宿舎は快適であり、会議の合間には街でビールなどを楽しむこともできた。

典礼研究の最先端を走る研究者たちが世界中からエキュメニカルに集まる場である SL は、毎回固有のテーマを設定し、それについての全体会（講演）と個別の論文発表とで構成される。今回のテーマは、SL 自身の理念とも深い関係を持つ「エキュメニズム」であり、それに関連する興味深い発表がいくつもあった。これらについては、発表の内容そのものもさることながら、発表に続くディスカッションが非常に有意義で、研究者としてはアイデア段階のものを SL に持ってきて、そこで得られたフィードバックをもとにさらに構想を膨らませる、という貴重な機会ともなる。また、あるテーマに関して、発表者自身の専門性を超えた多方面からの検討がなされる場所でもあり、限られた時間の中でも議論が深まっていく様子に目を見張ることもしばしばだった。何気なく発言した小生の一言を他の人が拾い上

げ、それがさらに議論を呼んでいくというようなこともあり、SL ならではの場の効用に目を見張られた。また SL は、「何かを知りたいればその専門家がすぐそばにいる」という得がたい場でもあり、会期中様々な知見を得ることができたのも小生にとってはありがたかった。

参加者では、誰でも名前を知っているというような「ビッグ・ネーム」の参加が少し減った一方で、新進気鋭の研究者が増え、徐々に世代交代も進んでいるように感じた。

今回は、全体的にコンパクトな開催を目指したようで、これまでに企画されていた中日の研修のようなものがなく、会期も 1 日短くなった。この研修は、自分では通常では訪問できないような場所を訪れる機会でもあるので、せっかくアイルランドを訪問した意義を十分生かせなかったような若干の寂しさを感じた。

SL は、嬉しい再会や新たな出会いの機会でもある。今回個人的に嬉しかったのは、二十数年前に留学先で教えを受けた先生と帰国以来初めての再会がかなったことである。また、多くの知人と旧交を温めることができたほか、何人もの研究者との新しいつながりを得ることもできた。メイヌース大学に日本から留学中のカトリックのシスターとキャンパスで偶然に逢い、連絡先を交換して帰国したところ、その方が香蘭女学校の卒業生であったのには単なる偶然を超えた何かを感じた。

今回、自身として初めての体験であったが、祈祷書改正について研究発表を行なった。SL では、同じ時間帯に複数の発表が行なわれ、参加者は興味のあるところに行くという形式なので、同時間に行われる発表によって人の集まり方が決まってしまうという側面があり、「ビッグ・ネーム」の裏番組となった小生の発表には数名の参加者のみとなった。しかし、各国聖公会を中心とした参加者とのディスカッションは非常に有意義であった。ある人からは、「今回の SL の中で個人的なハイライトだった」という身に余るお言葉まで頂戴した。

礼拝に関して様々なリソースに乏しい日本聖公会は、他との関係の中で豊かにされることが必須だと改めて実感した。特に、海外の聖公会各管区や、今回のような専門家集団との、継続的なコンタクトや人的つながりなどは、今後の日本聖公会にとって欠かせない貴重な資源だと思う。小生の携わる祈祷書改正も、日本聖公会単体では到底為し得ない大きなプロジェクトであることを日々感じさせられているが、それを応援してく

れる人々が世界の各地にいることを実感できたのは大きな励みであった。また、SLでも徐々に世代交代が進んでいる現状を目にし、次の世代の人々にこういったリソースを引き継いでいく自身の役割をも再確認させられた。

参加を可能としてくださった、管区や委員会のご支援に改めて心より感謝申し上げる次第である。

世界の聖公会の動向

- ☆ 主教たちによる初めての「ピア・ラーニング」の成功
- ☆ ハワイの教会指導者、山火事で破壊されたコミュニティを支援
- ☆ 教会襲撃事件を受け、正義と祈りへの呼びかけがなされる

管区事務所渉外主査

司祭 ポール・トルハースト

○主教たちによる初めての「ピア・ラーニング」の成功

先 日終了した史上初の国際的な「ピア・ラーニング」(※対話を通して仲間同士で学ぶ合うこと)の取り組みは、大成功を収めたと評価されている。24管区11ヶ国の主教たちがモザンビークのマプトに集い、アングリカン・コミュニオン全体での聖職訓練と専門能力開発の支援を目的とした、10日間のリーダーシップ・オリエンテーションが行なわれた。これは、新しい一連の地域イベントの先駆けとなる。

「この素晴らしい時間を共に過ごせたことを神に感謝いたします。分かち合い、互いに学び合い、信仰と愛と召命において共に成長することができました。私の兄弟姉妹たちが新たな知識を身につけてそれぞれの教区に戻り、ひいては会衆たちに祝福をもたらせることを嬉しく思います」と、アングリカン・コミュニオン事務局のアンソニー・ポグゴ総主事は述べている。

現地教会を訪問した後、主教たちは互いに

黙想の時間を過ごし、自分たちの役割と責任について話し合い、イザヤ書第6章を学んだ。

モ ザンビーク・アンゴラ聖公会(IAMA) マシエネ教区のアゴスティーニョ・ブーケ主教は次のように述べている。「これは私たちにとって、ひときわ素晴らしい経験となりました。というのも、これまでアングリカン・コミュニオンについて未知な部分があったのですが、このコースを通じ偉大な家族と出会うことができたからです。互いの違いを尊重しながら、コミュニオンの中で協力し続ける方法を共に学びました。何と素晴らしいことでしょう!」

この「ピア・ラーニング」には、手始めとしてアンゴラ、ブラジル、エスワティニ、ガンビア、リベリア、モザンビーク、ナミビア、南アフリカ、南スーダン、ジンバブエから、英語とポルトガル語を話す主教が集まった。

○ハワイの教会指導者、山火事で破壊されたコミュニティを支援

マ ウイ島で発生した山火事により 100 人以上が死亡し、由緒ある教会を含む 1,000 棟以上の建物が破壊された。そのためハワイの教会指導者たちは、被災者の目下のニーズを調査している。

この山火事によって、観光客を含む 11,000 人以上が避難した。最も被害が大きかったのはマウイ島西部のラハイナ（人口 12,700 人）で、この町には聖公会によりホーリー・イノセンツ教会が 1927 年に建立されている。航空写真によると、教会を含む地域全体が火災に見舞われる様子が確認できる。

教区にとって緊急の優先事項は、ホーリー・イノセンツ教会の関係者全員の安否と、避難所やその他の当面のニーズを把握することであった。そして現在も、指導者たちは復興への最善の道を模索している。

ホ ーリー・イノセンツ教会のブルース・デゴイヤー牧師は、「私が連絡を取ることができた人々のほとんどは火事で家が焼かれ、避難しています」と報告した。

「ハワイの人々は、ハリケーンや火山噴火にはある程度の備えがあります。しかし年長者でさえこのような山火事の経験はなく、今、私も含め誰もが大きなショックを受けています」と、ハワイ教区のロバート・フィッツパトリック主教は述べた。そして教会の再建について、救援活動が続く間は「優先事項ではない」としながらも、1845 年までハワイ王国の首都であったラハイナにとって、この建物は歴史的に重要であると指摘した。

同教会は 19 世紀後半に設立され、初期の礼拝はハワイ王カメハメハ 4 世が翻訳した共通の祈祷書を用いて行なわれていた。カメハメハ 4 世とその妻のエマ王妃は聖公会の信徒であり、英国聖公会をハワイに招き教会が設立された。ハワイの聖公会は 1862 年からハワイ王政が崩壊する 1893 年まで、ハワイ王国の国教であった。その数年後の 1898 年、米国政府がハワイ王国を併合し、1959 年にハワイ州となっている。

○教会襲撃事件を受け、正義と祈りへの呼びかけがなされる

ハ キスタンで起きた教会やキリスト教徒に対する暴力的な襲撃事件を受け、アングリカン・コミュニオン事務局のアンソニー・ポッグ総主事は正義が果たされるよう、次のように呼びかけている。「パキスタンのファイサラーバード地区でキリスト教徒と教会が襲撃されたというニュースを聞き、私は深く悲しみ、ショックを受けています。アザド主教と連絡を取り合い、法執行機関に正義と行動を求めています。パキスタンの冒涇法により、キリスト教徒や他の宗教コミュニティが不当に迫害されているのです。どうかパキスタン国民の安全のため、私と共に祈ってください。」

襲 撃は、ファイサラーバード教区内のジャランワラの町で発生した。報道によると、カトリックや長老派を含む 6 教会が焼かれ、聖職者が襲撃されたという。ライウィンド教区の主教でパキスタン（合同）教会の議長でもあるアザド・マーシャル師は、声明の中で次のように語った。「言い表す言葉すらありません。私たち主教、司祭、信徒たちはみな、このパキスタンのファイサラーバード地区で起きたジャランワラ事件に深く心を痛め、苦しんでいます。私がこのメッセージを入力する間にも、教会の建物が燃やされているのです。聖書はけがされ、キリスト教徒はコーランに背いたという濡れ衣を着せられ、ひどい責め苦を受けています。全ての市民の安全のため、ただちに法執行機関と司法関係者たちは正義のもと行動と介入をするべきです。どうか、独立と自由で名高い我が祖国において、命こそ最も価値のあるものだということを証明してください。」

Topics (日本経済新聞 2023・8/28 より)

トイレ設置に関する先見性

—日本聖公会管区事務所—

日本聖公会管区事務所のトイレ設置について日本経済新聞(2023/8/28) がきわめて高く評価しているので、以下にその概要をお伝えします。

職場のトイレをどう変える？

“職場のトイレが揺れている。働く人は多様化しているのに整備が追いつかない。…これからの時代に求められる職場のトイレとは何か。日経ウーマノミクス・プロジェクトの調査や企業の取り組みをもとに、職場のトイレを巡る課題を探った。

日経ウーマノミクス・プロジェクトでは7月に職場のトイレに関するアンケートを実施、671人の女性から回答を得た。自分の働くフロアのトイレでは「男性用と女性用に分かれているが多機能トイレはない」が50.8%と過半数を占めた。多機能トイレが「別のフロアにある」は17.4%に達し、アクセスの悪さが目立った。

アンケートではトイレの数などを中心に不満の声が少なくない。「中小企業の製造業では数を含めて配慮がなく、女性の視点からトイレをリニューアルした」など職場改善につなげた例もある。…

ではどんなトイレが理想か。実際の取り組み事例から考えてみよう。日本聖公会管区事務所(東京・新宿)では6月、教会の閉鎖に伴い礼拝堂だった場所に事務所を移すことになった。従来、教会の来訪者は隣にある事務所が入った別棟のトイレ(男女別) か礼拝堂の外にある多機能トイレを利用していた。移転に際し「女性は外の多機能トイレを使用し、室内に新しく男性用の小便器と洋式便座を設ける」ことで話が進められた。

これに待ったをかけたのが職員の金子登美江

さんだ。事務所で働くスタッフは女性の方が多いのに、毎回トイレに外へ出るのでは使い勝手が悪すぎる。雨ならば傘が必要だし、夏は暑さも厳しい。「もちろん善意で取り組んでくださっているが、意思決定の場が男性ばかりなので何が問題か気づかない。『またその話?』と言われながら意見し続けた」

結果、室内に誰もが使える個室を2つつくった。外部の人が訪れる会議は男性が多い時もあるれば女性のための時もある。休憩時間に滞りなく利用できるよう、性別での区別をやめた。…

TOTOが2019年に発表した調査では「男女トイレや多機能トイレとは別に性別に関わりなく利用できる広めの個室トイレがあった場合、利用するか」との問いにトランスジェンダーの72%、出生時と性自認の性が一致しているシスジェンダーの54%が利用する意向を示した。

日本トイレ協会名誉会長・顧問の高橋志保彦・神奈川大学名誉教授は「誰もが自分のアイデンティティを明かすことなく自由で快適に使えることが大切」と話し、「個室内に洋便器と小便器が併設されれば誰もが清潔で快適に利用できる」と提案する。

対話しながら進める

多様性を尊重する職場作りへの関心が高まっている。トイレに関してさまざまな意見はあるが、アンケートの回答にあった「対話しながら決めていけばよい。対話すらできない職場はトイレに限らず『安全』ではないと思う」という意見を企業は重く受け止める必要があるだろう。…多様な社員が働きやすい職場づくりは、多様な人が生きやすい社会の試金石になるのだろう。”

(編集委員・中村奈都子)

快適なジェンダーフリー、**個室トイレの実現**

以上は日本経済新聞からの抜き書きですが、取材を受けた金子登美江さん(管区事務所総務主事)が後日次のように付け加えていることを記しておきます。「何はともあれ、管区事務所のトイレが当初の予定のように男性トイレは建物の内

部、女性トイレは建物の外部という旧態依然のものにならずに、ジェンダーフリーを賛同する結果になり良かったです。しかも職員は快適ですからね。ジェンダーバイアスは気が付かないのですから、気が付いた人が声を上げていかねければなりません。何度も何度も却下されて大変でしたが最後は耳を傾けてくださり、誰でも使える個室トイレの2つ並びを採用してくださったのは、管区聖公会センター検討チーム長の山中一さんの視野の広さとの確かな判断によるものと感じています」。(構成・広報主事 鈴木一)



▲ジェンダーフリートイレの扉



10月中旬発売

聖公会手帳

2024年版

✦ 教会暦、日課表の最新版を完全収録

✦ 日本聖公会各教区の協力のものと、
管区事務所が責任編集

大型版 2,200円 (税込)

ポケット版 1,200円 (税込)

お申込みは **バイブルハウス南青山** まで

☎ 03-3567-1995

※インターネットでのご注文も可能です

バイブルハウス
QRコード



📖 管区・出版物案内

・『2024 年度 教会暦・日課表』

2023 年 10 月 1 日発行 頒価 300 円 (税込)

お求めはバイブルハウス南青山 ☎ 03-3567-1995
またはお近くのキリスト教書店にお願いいたします。

2023 年度 ヒルダ・ミッシェル信徒講座のご案内

今年のヒルダ・ミッシェル信徒講座は、日本聖公会のこれからの宣教活動のスタイルとして、特任聖職の働きにスポットを当て、信徒と聖職の協働・チームミニストリー（奉仕）について学ぶと共に、わたしたちがともに支え合いながら展開してゆく新しい教会の活動のあり方を考え、その可能性を探ってゆきます。

テキストにはヒルダ・ミッシェル叢書2『自給している聖職者たち』（第1、2、3、6回共通）と叢書3『信徒の働き』の第5章（第4回）、そして中村真希研究論文「チームミニストリーの実践と可能性」（第5回）を用いて行ないます。会場は渋谷聖公会聖ミカエル教会とし、Zoomを用いてリモート参加も可能とします。

第1回 9月3日(日) 午後3時から5時まで
テーマ 特任聖職とは（専業聖職との違い）

第2回 9月17日(日) 午後3時から5時まで
テーマ 英国国教会における特任聖職の実態

第3回 10月1日(日) 午後3時から5時まで
テーマ ミニストリーを成長させる特任聖職

第1回から3回までは各自テキストを読んで集まり、テーマについて意見交換する読書会形式で行い、中原司祭にはリモートで解説をいただきます。

第4回 10月15日(日) 午後3時から5時まで
テーマ 定住牧師のいない教会（信徒も担うチームミニストリー）

講師 山田益男（渋谷聖ミカエル教会信徒）

第5回 10月29日(日) 午後3時から5時まで
テーマ チームミニストリーの実践と可能性

講師 中村真希執事（聖アンデレ教会牧師補）

第6回 11月9日(木) 午後7時から9時まで
テーマ 特任聖職の歴史と日本聖公会における可能性

講師 中原康貴司祭（高知聖パウロ教会牧師）

参加希望者は渋谷聖公会聖ミカエル教会

TEL:03-3409-2079 FAX: 03-3409-2938

Eメール: shibuya.st.michael@gmail.com

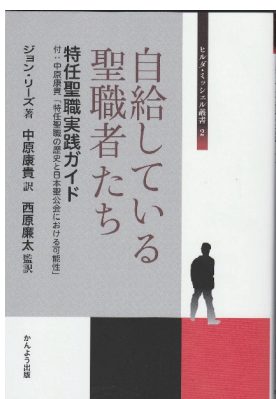
まで、テキストの要不要を含め 8月25日まで にお申し込みください。参加者には Zoom のミーティング情報をお届けします。

テキストは『自給している聖職者たち』については1,500円、『信徒の働き』は1,800円で、送料は無料としてお届けします。研究論文「チームミニストリーの実践と可能性」と『信徒の働き』の第5章については希望者に電子ファイルでお届けします。

なお、ヒルダ・ミッシェル叢書1の『魂の同伴者』を含め叢書3冊一括の場合には5,000円の割引でお届けします。



第6回 講師 中原康貴司祭





2023 年 宣教協議会テーマ：「いのち、尊厳限りないもの—となりびととなるために—」
主題聖句：「私はぶどうの木、あなたがたはその枝である。人が私につながっており、私もその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。私を離れては、あなたがたは何もできないからである。」（ヨハネ 15 章 5 節、聖書協会共同訳）

「聴くこと」からはじまる協議会

清里で行われる宣教協議会がいよいよ近づいてきました。実行委員会では、当日に開催されるプログラムごとにチームを編成し、分担して準備作業を進めています。

各教区の参加者の皆様には、オンラインの準備会を通して、協議会にむけて用意を進めていただきたい内容を共有いたしました。① 協議会初日に展示される、各教区の発表の場であり交流の場、「実り持ち寄りブース」の設置準備、② 各教区のこれまでの宣教の歩みについて学びを深めていただくこと、そして ③ 3 日目の 11 月 12 日（日）に行われる、宣教協働区ごとの交流企画「宣教協働区アワー」の準備、の 3 点です。また諸委員会からも「実り持ち寄りブース」が準備・展示されると伺っています。ご準備をどうぞよろしくお願い申し上げます。

各チームでは、プログラムの内容に関する話し合いも深められています。協議会 1 日目の 11 月 10 日（金）に行われる、日本聖公会の 3 つの教会から代表の方にお話ししていただく企画は「私たちのあゆみ～物語を聴く」、そして 2 日目の

11 月 11 日（土）に行われるパネルディスカッション・分科会は「いのちの現場から聴く」と名付けられました。お話しくださる方それぞれの思いや語り、となりびとと出会い、共に歩き始めた物語を「聴く」ことを通して、これからの宣教・牧会のあり方について、また全体テーマである「いのちの尊厳」「となりびととなること」について、思いを深めていくこととなります。

実行委員は 8 月 3 日（木）～4 日（金）に東京のナザレ祈りの家にて合宿を行い、全体の流れと個別のプログラムに関する打ち合わせを行いました。またスチュワードの皆様（協議会運営にあたり、さまざまなサポートをして下さる方々）とのオンラインミーティングを、8 月 21 日（月）19 時～21 時に開催しました。話し合いを深めれば深めるほど、必要な準備作業の多さを痛感する毎日です。それでも協議会の全体像が明らかになり、当日までの道筋が見えてきたことに、神様の導きを感じ、委員一同力づけられ、励まされています。

これまでも実行委員会は、宣教・牧会の現場におられる方々の声から「聴く」プロセスを大切にしてきました。オンライン及び対面の会議で準備を進め、アンケートの実施や「ぶどうの枝分科会」の開催によって、日本聖公会に関わる一人でも多くの方と、対話のキャッチボールを続けながら、議論を深めてまいりました。そして清里での協議会においては、それらの「聴く」プロセス、応答するプロセスの一つの実りとして、2023 年宣教協議会から、日本聖公会と関わりを持つ一人ひとりの方々、教会、教区、管区、そして教会を越えて、世界に向かってゆく呼びかけである、「清里コール」を作成したいと考えています。

この「清里コール」につきましては、どのような内容になるのか、これから実行委員会で検討していきたいと思います。全世界聖公会がランベス会議にて呼びかけた「ランベス・コール」と響き合い、世界と地域とをつなぐ、現在の日本聖公会が行なう内外へのメッセージの発信となります。当日参加者の皆様にはグループディスカッションや祈りを通じて、この「清里コール」の作成を共にしていただきます。当日オンラインでご参加の皆様、また参加はされないものの関心を寄せてくださる皆様とも、その作成プロセスを共有しながらすすめることができますことを願っています。

ご一緒に、様々な方の思いを「聴くこと」から、この協議会を作り上げていきましょう。



2023.
10/29
聖霊降臨後
第22主日

聖ヒルダ礼拝堂

社会 の 日 事業

喜ぶ者と共に喜び、
泣く者と共に泣きなさい。

(ローマ12:15 聖書協会共同訳)

【本年度信施奉献先】
（福）聖ヒルダ会
（横浜市戸塚区）
軽費老人ホーム
ベタニヤ・ホーム
大規模改修計画のため

ベタニヤ・ホーム

St. Hilida's Association

日本聖公会

日本聖公会管区事務所ホームページ <http://www.nskk.org/province/>

☆「管区事務所だより」についての要望・寄稿などをメール、また郵便でお寄せください。

comm-sec.po@nskk.org 広報主事（鈴木 一）宛て